大分県芸術文化振興会議会報

芸振

No.30　51. 3

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・米　田　貞　一　　編集人・衛　藤　　久

〝夢の舞台〟の実現

県芸振会議理事
大分合同新聞社文化部長　宮　瀬　香多士

県下洋舞踊界の歴史も、ずいぶんと長いものだろうが、そのなかで一つの〝変革期〟となったのは「白鳥の湖」の全幕公演だろうと私は思っている。

「白鳥の湖」は昭和46年10月に県芸術祭の開幕行事として公演されたものだが、県洋舞踊協会が１本のまとまった作品を上演するというのは初めての試みだったと聞いている。もちろん以前から年１回〝合同公演〟というのはやっていたが、これは加盟各研究所が、それぞれ別の作品を上演するという形だったので、この「白鳥の湖」公演とは全く異質のものだといえよう。

私など外から「白鳥の湖」の練習ぶりをながめているものにもご苦労のほどがわかるほどだったから、協会員の方たちのご苦労はさぞかし……というところだっただろう。しかし、この「白鳥の湖」全幕公演は県洋舞踊協会に大きなプラスをもたらしたものと思う。各協会員の〝和〟はますます深まっただろうし、みんなが力をあわせてやれば〝夢の舞台〟も実現できるという自信もわいてきたのではなかろうか。

公演のあと「もう一度、こういった公演をやりたい」という声が協会員の方からきかれたのは、練習―公演を通じてあじわった充実感が非常に大きなものであったということの現われでなかったかと思う。また３年後の昭和49年に上演された創作バレエ「朝日長者」も、この経験がなかったら実現していなかったのではないかと思う。

「朝日長者」の場合は台本、作曲も県内在住の関係者によってなされたが、こういう人たちに協力を願う場合も、上演までのおおよそのスケジュールなりが体験的につかめていなくては難しいだろうし、受ける側も上演する側の過去のキャリアというものが創作する上での大きな寄りどころ、安心感になったものと思う。

こういった種々の点から考えれば「白鳥の湖」公演のはたした役割、意義というものは大きく、これがその後の発展につながる土台になったということができるだろう。

創作バレエ「黄金花さく炭焼小五郎ものがたり」
（佐藤朱音）より

県芸振会議理事
県美協副会長　大崎　聡明

こうして苦労を重ねて作られた「朝日長者」だが、今のところ１回きりの公演に終わっている。これは惜しい気がする。協会内部でも再演計画がねられているようだが、創作ものの再演は、どしどしやっていった方がよいのではないかと思う。もちろん経済的な問題や男性陣を東京からよばねばならぬなど多くの困難な点はあるだろうが、なんとかして〝再演〟ができぬものだろうかと思う。台本―作曲―振りつけ―そして上演までに費した労力が大きかっただけに、よけいそんな気がする。また、そのなかから次の飛躍への道がさぐられてくるのではないかと思ったりもする。

現在、大分県下ではオペラ、演劇など互いに刺激し合う環境には恵まれている。こういった環境の中から、よりすばらしい未来を切り開いて行ってもらいたいものだと願っている。

大分県の舞踊界 昭和20年、30年代の

洋　舞

不死鳥ははばたく

舞踊家　竹　内　　永

「あの頃、あの時」という題をいただいて、すぐ頭に浮かんだのは焦土と化した大分に引揚げて来て、その原っぱに立った時の夕焼けでした。

第１回のリサイタルで「不死鳥ははばたく」という原田種夫さんの詩に踊りをつけ、当時ＮＨＫ放送局長牧さんの朗読で、たしか金池小学校の講堂で踊ったと思います。文化会館、劇場というものはなく映画館を借りて上演するのが精一ぱいのところ。衣裳といっても布は無くお母さん方は着物をほどいて裾廻しの布をつなぎ合わせ子供の衣裳を縫ったものです。舞台装置といっても板切れを寄せ集め泥えのぐで最小限のもので間に合わせました。音楽といえばＳＰの78回転、焼け残ったものの中から曲を選びました。何もかも無いものづくしの中から「不死鳥ははばたく」の如く立ち上がったのです。

私の最初の生徒さんは佐藤　茜（あかね）さんが五歳、安部峰子さんが小学校五年生だったと思います。お母様に連れられて大変にかわいいおカッパのお嬢さんでした。（安部峰子さんはなくなられましたが、佐藤朱音さんは現在大分洋舞踊界の第一線で活躍しておられます）私もお嬢さん気質の抜けきらない20代でしたから気ままにレッスンを続けておりました。そのうち生徒さんも増えて名劇（今は無く西銀とパチンコ店になっているところ）で公演を持つことになりました。丁度私がしょく台にローソクをつけ「焔の女」を踊っている最中、楽屋が火事になり停電。暗黒の舞台で立ち往生、お客さんは、われ先にと外へ飛び出し私は広い舞台でただひとり。丁度焼野原の夕焼けの真赤な陽をみる様でした。数10分後、ボヤもおさまり落ち着いてみると客席は満員、このまま中止にしようと思っていた私には大感激でした。それほど観るものに飢えていたというか、求める心が大きく舞台と客席が一体になって何かを求め合っていたと思います。

昭和24年全国舞踊コンクールが東京新聞社の主催で行われました。戦後第１回で、私はたまたま上京し、コロムビア教育課の方からそのパンフレットをいただき、どの程度のものか分からないけれど出品してみようかと出したのが〃砂山〃で文部大臣賞をいただき、こちらの方がびっくりしてしまいました。このまま大分にいてはお山の大将になるだけ、私も20代後半でしたからもう一度勉強し直さなくてはと上京したわけです。東京もまだ食糧難で新宿西口は焼野原でした。新橋の駅前広場はヤミ市、だれもかれも風采の上がらない格好をしていましたが何となくこれからの世界は……と希望を持ち、私もこれから自分の青春が始まると胸躍らせたものです。稽古の帰りに立寄った路地裏のうなぎやさん、七輪の炭火をウチワでバタバタあおぎ、そのたちこめたにおいが、たまらなく空腹を満たしてくれました。お金は無かったけれどだれもかれも生きること、自分の仕事に純粋であったと思います。

昭和28年テレビが始まり、ＮＨＫ内幸町の102スタジオでのテレビ初出演も冷汗ものでした。今と違ってビデオなどなく本番そのまま放映されるのでその緊張といったら話になりません。30分番組で踊り、八曲振り付け、徹夜の連続、終わるまで死ぬ思いでした。ところが終わって民放からも問い合わせがあったり最優秀番組に入ったりして自来十数年ＮＨＫの仕事をしてまいりました。その間自分の発表会も開き、と、今振り返ってみるとよくあんなエネルギッシュに動けたものだと思います。いつの場合もゼロからスタートしていた様ですね。周囲に恵まれていたことも、運が良かったこともありますが、やはりここまで私を支えてきてくれたもの、それは〃バレエを愛する心〃だったと思っております。

[redacted]

※　筆者はエリアナ・パブロワ（ロシア革命後日本に亡命日本バレエ界に尽くした世界的バレリーナー）の門下、24年全国舞踊コンクールに創作「砂山」を発表、文部大臣賞を獲得している。この時出演した研究生の中に、見岳千恵子、伊坂里美、安部峰子、佐藤朱音の各氏がいた。

前略　私が大分市で洋舞踊研究所を開いてから十年を迎えることができました。竹内永（現東京）、故石井漠両氏のご恩はもとより、これも郷土大分に住まうおかげと皆さまがたのお力のたまものと心からのお礼を申し上げます。つきましてはその記念に次のとおりリサイタルを開くことになりました。

本公演には私が現在指導を仰いでいる日本バレエ界第一線で活躍している笹本公江、永江厳ご夫妻（東京）も特別出演してくれます。どうぞご覧くださいまして、これからもよろしくお願い申し上げます。後略

大分市中島五条二丁目　安部峰子　拝

安部峰子舞踊研究所十周年記念リサイタル（大分）九月十六日（土）大分市トキハ文化ホール、（別府）九月十五日（日）別府市公民館（ともに午後三時、六時半二回）

後援　大分・別府両市教育委員会、大分合同新聞社、ＯＢＳ大分放送

Ｓ37.9　安部峰子舞踊研究所10周年記念リサイタル案内状から

20年代の県洋舞踊界

県芸振会議監事
県洋舞踊協会長　平　瀬　克　美

食器の中の米粒を数えるようにして食べた雑炊、母の古着を仕立て直して着たモンペ、戦争は終わったとはいえ、今日では想像もつかないようなひどい生活をしていたのが昭和の20年代でした。当時私は金池小学校に奉職し、授業が終わった放課後、小さなオルガンのそばで子どもたちと歌ったり、踊ったりしてはこのわびしさをまぎらしていました。 そんな折、 子どもに舞踊を教える先生が現われました。竹内永先生でした。子どもに夢を抱かせるすばらしいことだと心温まる思いがいたしました。

戦前のことです。玖珠町出身の麻生先生という男の先生が舞踊の指導をなさっていて、私もお目にかかり指導を受けました。何回か教育会館で発表会も開催いたしましたが、その後、ご病気でおなくなりになりました。

もちろん戦後では竹内先生が洋舞踊の草分けで、心打つ作品が多く、発表会をたのしみにしていました。その後、東京新聞主催の「全国舞踊コンクール、児童舞踊の部」で第１位となり、文部大臣賞を獲得されました。これは当時大分市民に明るいニュースとしてもたらされ、その時の作品「砂山」は今でも私の心に焼きついています。当時竹内先生の門下だった、安部峰子、佐藤朱音、伊坂里美、見岳千恵子の諸先生方が後の大分県の洋舞踊界で活躍なさっていられることからも先生のご指導が推測されます。

竹内先生とほとんど同時に、別府市に成田利毅先生が「潮バレエ研究所」を開いておりました。その門下に湯原恭子、くろさあこ両先生がおられ、現在活躍なさっておられます。

竹内先生は受賞後間もなく東京へお移りになり、その後、見岳千恵子先生が「てるぶ舞踊研究所」を開設されました。見岳先生は大分大学学芸学部にお勤めで、その門下として伊坂里美、笠木啓子両先生がおられました。

昭和23年、私は学校を退職し家庭にはいりましたが、教え子たちがよく遊びに来ては、一緒に歌ったり踊ったりして遊びました。ふと、「教育者の立場から舞踊の指導をしたら」と思いつき、金池幼稚園をおかりして遊びの場を持つようになったのが昭和24年だったと思います。子どもの心をみつめて、舞踊を教えるのでなく、心から踊るたのしみと、苦しみを味わう場をつくろうと思いました。５人が10人になり、26年には発表会をするまでになりました。そうなると名前がなくてはと、子どもを育てるところから「ゆりかご」と名前をつけ、金池小学校の講堂でささやかな会を開きました。白いスフ布で簡単なワンピースを作り、厚い重いＳ盤のレコードを使用したことを懐しく思い出します。第２回からは、中央映劇(現、20世紀）で開催しましたが、ここではわざわざ夜の映画を中止して、スクリーンを後方に下げ、幕を張ってステージを作りました。

その頃、日田市では「わかあゆバレエ研究所＝樋口愁枯先生」と「日田近代バレエ研究所＝八十野辰美先生」が開設されていました。

昭和20年も終わり頃、安部峰子先生が研究所を開設され、大分県の洋舞踊界も躍進の途についた感がありました。

１日１日、１年１年と世の中は安定し、子どもたちも落ちついて勉強に、遊びに励むようになったのが昭和20年代だったと思います。 しかし、 設備の面では不十分で発表会の度に、「いいホールがほしいな」と思いました。

最後に、これは私事を軸にして20年代を振りかえって綴ったものでございます。

[redacted]

バレエ(Ballet)とは・・・

バレエ（Ballet）イタリアの宮廷から発生し、フランスに移り、さらにロシアで発達した舞踊劇をいう。18世紀のフランスの舞踊家ノヴェールの出現によりそこに劇的な形式がはじめて与えられ、20世紀になり、西欧より移植されたバレエはロシアにおいて見事に開花した。クラシック・バレエ（正しくはバレエ・ロマンティック時代の作品）として今日も盛んに各国で上演されているチャイコフスキーの三大バレエ曲「白鳥の湖」「眠れる森の美女」「くるみ割り人形」などいずれもロシアで初演された。1909年、ディアギレフの「バレエ・リュッス」が登場、ストラヴインスキーをはじめ、数々の作曲家、ピカソほかの美術家を動員、舞踊家としてはニジンスキー、フォーキン、カルサビーナなどの参加をえて数多くの近代バレエを確立した。

日本におけるバレエは、明治の末帝国劇場歌劇部の教師としてＧ・Ｖ・ローシーがダンス・クラシックの基本を教えた石井漠、高田雅夫、せい子、小森敏などを生んだ。バレエの基礎は昭和の始めにロシアから亡名して来ていたエリアナ・パブロワによってうえつけられ、その門下から東勇作、橘秋子、服部智恵子、島田広、大滝愛子、貝谷八百子、らが出た。さらに日劇ダンシング・チームを教えたオリガ・サファイア門下から今日も活躍している松山樹子や松尾明美らが育ち、第二次大戦後、はじめて全曲上演された東京バレエ団の「白鳥の湖」（小牧正英演出・振付）につながっている。その後のバレエの発展は目ざましく、バレリーナとしては一時代を画した谷桃子を生んだが、現代はさらにバレエ界の地図は一変し、文化庁などの助成の力もあるが、全国的に良いバレエがみられるしくみが出来つつある。日本バレエ協会は社団法人に発展、バレエ団としては、チャイコフスキー記念東京バレエ団が再度の海外公演で成果をみせ、松山バレエ団の森下洋子はバルナの国際バレエコンクールで金賞を得るところまで日本のバレエは著しく向上した。

あの頃　あの時

佐藤朱音（あかね）
佐藤朱音バレエ研究所主宰

舞台芸術であるバレエを発表し、観賞してもらうには、それ相当の舞台が必要になってくる。にもかかわらず、トキハデパートの文化ホールが唯一のホールであった頃……大きな作品は舞台からはみ出してしまうために、公演が出きない……夢のように本格的なホールを待ち望んで暮らした時期……やがて別府国際観光会館が誕生し、その喜びを「白鳥の湖」の全幕公演に託して公演したものでした。

しかし舞台づくりの苦労を外に、「バレエは決していかがわしいものではありません。どうぞ観て下さい」等と極端ないいわけをして、観客動員をしなければならなかった現実に苦しみ、どうしても大分県の、教育委員会の、ご協力をいただかなければならないことから、ご理解をいただくために「白鳥の湖」のあらゆる資料やフィルムを持って県庁に日参した日々もあり、〃後援〃のご協力をいただいた時は、どんなにか喜び、救われたかしれません。

それから10年近く経ち、今度は、大分県が主催になって、その上費用の応援もいただいて、洋舞踊協会合同公演の「白鳥の湖」が成ったこと、また県芸術祭10周年の折には創作バレエの公演にまで発展してきた洋舞踊界のことを思えば、欲望は尽きないにしても、しみじみと各分野の方々のご理解とご協力を感謝せずにはいられません。

今昔問わず、日本中のバレエに携わっている者のほとんどが、研究生の指導を根底に、企画、制作、演出、振り付け、舞台まわりや衣裳のこと、経費の分野に至るまで、個人の力で処理しなければならない現状に、少しでも、まわりからの応援の手をいただくと、どれほど勇気づけられるかわかりません。

戦後、大分に洋舞踊の種をまかれた恩師、竹内永先生が、舞踊家を決心して上京した私に「バレエの道は苦労ばかりで、やめられるなら、やめた方が良いよ」と深いため息といっしょに語られたその心境が、いかに深く複雑なものであったか、今となって理解できることになったわけです。日本にバレエ芸術の種をまき、育てられた先生方のご苦労は想像を絶するものがあると思います。

その地道な努力の跡を、やや急ぎ足に、無手っ法に歩いたと思われる昭和30年代、またそれを見守り、支援してくださった方々のおかげがあって40年代、そして今日があるのを忘れてはなりませんが……。

あの頃のこと、あの時のことを、あれこれ思いめぐらせますと、心の余裕ができたと申しましょうか、「いよいよこれからだなあ……」と無心にレッスンを続ける幼い子供たちの顔を、まぶしくながめる今日この頃です。

社会奉仕から出発

樋口愁枯
わかあゆバレエ研究所主宰

―研究所という呼称は、私の場合不適当であるが―

昭和25年７月、学校が夏休みに入ってから、「わかあゆバレエ研究所」は当時、私の勤務校、日田市月隈小学校の講堂を借りて発足した。

戦後の巷間（こうかん）に、ようやく文化？という名のつく、いろいろな文化団体が群生したころだった。

果たして文化的なのか、教育的なのか、私は一教育者の立場で、子供たちの欲求の姿を見つめた。

文化活動というその中の一つに、舞踊の氾濫（はんらん）は急速だった。

当時のデカタン的な世相がそうさせたのであろうか、子供たちの踊りの中に「やくざもの」「股旅もの」を教える芸能社への通塾者が増えた。

ここで習った踊りは、大人たちの酒席で、村の演芸会ではなばなしい拍手を受けて、子供心を満足させた。

私は子供の生活から、健康で、明るい健全な舞踊の創造を痛感した。このきっかけが私の舞踊指導の出発となった。

余技であり、私のもつ学校リズムとバレエのテクニックを総合して、モダンバレエの指導を思いたった。

私は公務員であり、学校の教員という本職をもっている。

あくまで社会への奉仕から出発し、指導は余暇を当てることにした。

この主旨を支え、後援してくださった日田市教育委員会と社会教育課の後援をいただいて、現在の公民館に練習場を移したのは、その翌年である。（以後現在まで25年間）

私たちの稽古場には、他の研究所や舞踊団が持つような鏡もなければピアノも持たない。

踊りたい。踊ろう。学ぶう。という子供の意欲に押し流されて、いつの間にか年を重ねてきた。

私が練習場を開いてから数年して、県洋舞協会が結成された。この協会が県芸術振興会議に、クラシックバレエ「白鳥」と、モダン「朝日長者」を上演するまでに成長した。

踊りたい者が、学びたい同志が練習場で共に学ぶグループの私たちのサークルに月謝は不要である。

だから続いてきたのかもわからない……。黒かった髪も今は昔。霜の夜の練習に年齢を感ずるこの頃、ようやく、あとを継ぐ者を育て得てほっとしている。

この道がこの子等の生活の支えとならずとも、生きる支えとなるであろうことを信じつつ、歩いて来た道の無意味でなかったことを思い、ひとり満足している。

日　舞

映画館が発表会場に

花　柳　芳七治
七治（しちはる）の会主宰

電気のついていない劇場での陸軍慰問や海軍病院への慰問なども楽しい思い出となりました。終戦になり進駐軍に招待されて、チョコレートのお土産をいただき、昨日の敵は今日の友となりました。当時は流行歌が、大変に人気を呼び、その振り付けに追われる中に、世相も落ち着き、昔の古典舞踊を見直す時代となりました。

昭和22年に新聞社の主催による各師匠方の会が、始めて催されました。当時は舞踊協会はまだ発足しておりませんでした。会場である、別府松涛館は満員で、お客様の大変な感動は今も忘れられません。出演者もお客様に失礼にならぬ様気遣いも大変でした。私の名取ができました昭和24年頃より、大分の文化祭、春まつりなど、掛舞台ができて、風や砂ぼこりのする中で、各社中の出演でにぎわいました。

日本舞踊も次第に盛んとなり、私の住まいの亀川より大分までをオート三輪で通い活躍しました。劇場はアポロ劇場中央劇場など映画館を利用しての発表会でした。今のように交通の便利さもなく、発表会の日が嵐の日と重なり衣裳などが、遅れて着き、はらはら、おろおろで開幕した事も思い出の一つであります。

昭和28年に大分市舞踊連盟が発足いたしました。会長藤間小伊松、副会長花柳寿三鶴と私でございました。会員は20名前後で、月一回の集会を決め、初めての親睦を計る会といたしました。それ以後、春まつりやＮＨＫ助けあいなどに協会の立場より参加し、協会の活躍が始まりました。今思えばこれが現在の大分県日本舞踊協会の前身となったわけでございます。

[redacted]

◦**第５回ヨーロッパ芸術舞踊視察団**、笠木バレエ研究所の笠木啓子さんは上記視察団の一員として、去る２月14日羽田発イタリア、フランス、ベルギー、スペイン等の視察に参加した。

師友に助けられた30年代

藤　間　茂登女
県日舞連理事・藤茂会主宰

子供時代は外地での舞踊稽古。終戦で引揚げ、娘時代はトキハで催事の何かにつけて振り付けをし、そして家庭人として昭和30年には長男の出生。別府の家では近所のチビッコ相手に稽古の毎日がつづいていました。

さて、わたくし主催の第１回発表会は、別府公民館で34年でした。藤間流のおさらい会としては、大分県では珍しく照明に力を入れ、柏木さん（当時井元一二三）にお世話になりました。また友情手伝いとして花柳有句秀、芳七衛門ご夫婦にお力添えをいただいたことは、今も思い出の一つとなっています。当時は公民館の利用度も高くなり他の興業と重なり後援会の人の力で無事日取りが決まるなど思わぬところで気をつかいました。終演も夜中の１時までなりましたが、当時のお客様ものんびりしたもので結構楽しんでいただきました。当時別府舞踊協会にも入会させていただき、会長は花柳三寿志師で会員は20名ほどでした。協会の活動は別府の観光宣伝に一役買って名古屋など県外まで出かけていました。協会主催の会も公民館で開かれ、私は角兵衛の鳥追いを演じ、最後に全員でかっぽれを踊った写真が今も残っております。

続いて34年には、大分合同名流会が始まるわけですがこの頃は大分に住み、名流会の当時の係であった菊地氏とも近くでした。名流会出演者は20名と限定され、藤間は私と賢美さんの２人、若柳流は、故吉一菊師、吉正寿師、花柳流は三寿志師、芳秀治（現有句秀）、芳七衛門ご夫婦、昌吉郎師等、ほか皆さんでした。始めての合同技を競う会でしたが、必死で背のびをしたものでした。それまでお嬢さん芸だった私は完全に圧倒されました。翌年第２回目には藤間流制定の長唄「松」を踊り、皆さんの仲間に足をそろえるよう必死に取り組んだのも思い出の一つです。

その頃、故安部峰子バレー研究所を借りてバレーの平瀬先生、米田の奥様、中沢さん等に日本舞踊を教えるなど大分での歩みが始まりました。

藤間流第２回目の会は別府で34年、大分での第１回を38年にトキハ文化ホールで二男を腹にかかえて演じました。今考えると少々無謀とも見える行動でしたが、若さと負けぬ気で、ただ一生懸命藤間をもり上げるべく努力しました。38年第４回名流会では、各流合流して「三人片輪」を花柳芳七衛門、三美代と共に演じました。その時の花柳三之輔（東京在）師の指導を受け、セリフ演技の勉強をしましたが、師の指導が大変お上手でユーモアの中にもきびしさのあることを実感しました。一方、流派を越え古典の味わいを教えていただき一生忘れ得ぬ思い出の一つです。30年後半は子供も小学生になり、ＰＴＡや舞踊競演、故加藤真一郎氏とのおつきあいをはじめ大分、別府の知名人と交流がはじまりました。幸い当時の県日舞連盟会長藤間小伊松師の力添もいただき、また、トキハ時代の友である波多野哲子さんからも会の司会などでいろいろと助けられるなど、今日私があるのもこうした多くの方々から学ぶ所が非常に多く、また皆様にかわいがっていただいたおかげだと昭和30年代を回顧しております。

[redacted]

懐しさでいっぱい

花　柳　寿三鶴
鶴扇会主宰

昭和21年３月、名披露目の会を若松で開催。私は当時若松に住んでおりました。

終戦直後のこととて、かつら等も無く台金から作る様な有様でした。福岡のアメリカ軍司令部に出演番組を提出して、許可を取ってからしか上演できませんでした。もちろん仇討ちモノなど許可がありませんでした。

昭和22年４月、第２回の会（若松）。この会に出演後、別府に引越してまいりまして、花柳三寿志、芳満知、芳七郎（現昌良）、の師にご挨拶に廻りました。舞踊連盟等未だありませんでした。この年に、別府松涛館にて新聞社主催の各派合同の会が、始めてあり、三寿志、芳満知、昌良、故若柳吉一菊、藤間勘八郎等出演の会を拝見しました。

昭和23年10月、別府鉄輪大正館にて第１回目の私の主催する会を催しました。昭和25年から大分市に稽古場を持ち終戦時よりやっと落付いた、気持ちとなりました。27年頃より、大分の春まつりがにぎやかで、昭和通りに掛舞台ができて、各社中が、出演して一日中踊りがありました。

当時は民謡団体もなく、日本舞踊会員が活躍したものです。楽しかった思い出となりました。昭和27年３月。大分アポロ劇場にて大分鶴扇会（私の主催する会）の発表会を催しました。当時アポロ劇場しかありませんでした。昭和29年10月、第２回発表会を大分中央映劇で催しました。映画館のため、所作舞台も大道具、背景も無くて閉口しました。

映画の上映の終わるのを待って11時頃から、舞台作りをしたものです。トキハホールができるまで何度か映画館で会をやった様な気がいたします。本当に20年代は、楽しかったこと、苦しかったことを思い出すと共に懐しさがいっぱいです。私もまだまだ若くて元気でしたので鉄輪、若松、大分、小倉と大車輪で走り廻ってお稽古をしておりました。

激励の電話が

花柳　三鶴千代
県日舞連理事・三鶴千代の会主宰

日本舞踊がようやく盛んになりかけたのは昭和30年ごろでした。しかし、個人で定期発表会をもつ先生は、まだ２人か３人というありさまでした。

私は32年に第１回ゆかた会を開き、清心園のみなさんをお招きしましたが、 これが慣例となって、 それから毎年の様に養老院のおとしよりの方々に見ていただいております。

当時、私の後援会長が故堤喜代蔵様でしたが、堤会長さんのところに「〃なかなかいいことをしてくれる。応援するからしっかりやってください。〃と言って、見も知らぬ人々から電話がかかったよ」と私に話してくださったのを感激して聞いた記憶があります。まだその当時はテレビも普及しておらず、老人の娯楽の少ないときでしたので、よけいに喜んでくれたのでしょう。

32年になると、県下に先生も増え、お弟子さんも愛好者の数も急増したようです。 このころになると、 発表会をもつ先生方も増え、私もこの年に第１回発表会を開きました。

しかし、まだ衣裳、かつら、顔、小道具など貧弱なもので、田舎芝居のような衣裳やかつらが情けなく、小道具がなくて自分たちの手で作ったりした思い出があります。会場とてもトキハ文化ホールが市内唯一のもので、大道具さんもさぞかしお困りだったことと思います。

そのような悪条件下ではありましたが、やはり第１回発表会という感激は大きく、このときに各方面からいただいた身に余るご好評が、それからの私を強く支えてくれたのでした。

結局、最も混乱の時期に第１回発表会をもち、その混乱を乗りこえて今日までやってきたわけですが、いま思えばよくもまああのような勇気があったものだとわれながら感心したり恥入ったりする次第です。

日本舞踊は民踊と違ってただリズムに乗って踊るだけではなく、独特の制約があって、簡単にはいって行けない困難な条件がありますが、これも教える者と教わる者の心構えひとつで、基礎をみっちりやることが初心者にとって最も大切なことです。わたくしたちが入門したころはただ師匠の身振り手振りについて行くだけの稽古でしたが、いまの若い人を納得させるには基礎練習が必須課題だと思います。

ともあれ、今日の日本舞踊の盛況は、戦後の混乱期を乗り越えて精進してこられた諸先輩方の賜だと思います。私たち若い者はその果実を受けついで、さらに発展させるのが義務だと考えます。そのためにも、いまこそ「どうすべきか」をしんけんに討議するときだと考える次第です。

日本舞踊の種類とその代表作品

種類	その意味	代表作品
道成寺舞踊	能楽には安珍・清姫の伝説から生まれた「道成寺」があるが、日本舞踊には道成寺に関する踊りが40余種類ある。	「京鹿子娘道成寺」・「傾城道成寺」など
三番叟舞踊	能から歌舞伎に移入したもので、幕あきの祝儀として舞うもの。	「舌出し三番叟」・「寿式三番叟」・「晒三番叟」・「剱鳥帽子三番叟」など
石橋舞踊	能楽の「石橋」から生まれたもの、享保時代の「相生獅子の乱曲」がはじまり。	「相生獅子の乱曲」・「英執着獅子」・「連獅子」
丹前舞踊	承応・明暦（1652～1657）の頃、松平丹後の守の屋敷前に風呂屋があった。江戸市民はこれを丹前風呂と呼び、ここに通う遊客の風姿を丹前風といい、世相に敏感な芸能界はこれを丹前舞踊としてとり入れ、明和・安永（1764～1780）に全盛した。30余種目がある。	
草摺引舞踊	曽我五郎と朝比奈と力比べをして朝比奈の草摺り（ヨロイの胴下に垂れて腰をおおっている部分）を引いたという物語に出た舞踊。	「兵根元曽我」・「正札附根元草摺」
蜘蛛舞踊	源頼光が病気で寝ているところへ土蛛蜘の霊が僧形で現われ、頼光に斬りつけられ葛城山に追いつめられ退治される。というのが、能楽「土蜘蛛」の筋ですが、これを母体としたもの。	
道行舞踊	なにかの目的で長い道中を行くのを道行というが、これには恋愛的なものと、そうでないものとがある。しかし、江戸中期近松門左衛門の心中道行物が現われてから、この種の道行物が非常に流行した。	静御前と佐藤忠信の「吉野山道行」・お軽と勘平の「道行旅路花聟」
松風舞踊	松風と村雨の姉妹の海女が在原行平を恋いしたうその別離の悲しさと狂乱だけを踊るもの、能楽の「松風」を母体としたもの。	「松似候男姿」・「浜松風恋歌」・「須磨」
変化舞踊	妖怪変化ではなく、すこぶる変化の多い踊りという意味。一人の俳優が一つの本名題（題名）の中で二つ以上の独立した踊りを連続して踊るので、踊りの美しさに加えて早変わりの演技が人気を呼んだ。	「七化狂詩」・今日では変化舞踊の中から一つずつを切り離して踊る傾向が強くなっている。「鷺娘」・「越後獅子」・「保名」・「鳥羽絵」・「浅妻船」・「藤娘」・「子守」・「玉屋」・「年増」・「座頭」などがその代表的なもの。
その他	舞もの舞踊・松羽目舞踊・御祝儀舞踊・雑舞踊・狂乱舞踊・曽我舞踊	

文化団体のあり方

県美協の会長がいまだに決定しない。文化団体が人事問題でもめることは恥ずかしいことである。特に県美協は県内の文化団体としては最大で、歴史も古く代表的な団体であり、こんなことで一年近くもゴタゴタしていると物笑いのタネとなり、一般の方々に不信感を抱かせるもとになると思う。

この原因については明らかにされていないが、新聞誌上等によると各部の思惑や、人間関係が絡まっていて難航しているとか、事実とすれば何ともみっともないことで、汗顔のいたりである。

美協は大世帯である。日本画・洋画・彫刻・工芸部と書道部・写真部との話し合いは十分に行い、お互いに理解しあって、会の運営をスムースにやるべきである。

県内在住のほとんどの美術家が参加している県美協はなんといっても親睦が第一義の団体であると思う。美術家の集団であるので研鑽を第一に考える人も多いが、作品の傾向が様々であり、会全体としての統一した研鑽はできにくいようだ。従って会員同志がお互いに連絡をとりあい、報われることの少ない精進努力に対して、より良い制作環境をつくり出すことが県美協の仕事であると思える。このための協会代表たる会長は、積極的に外部団体機関と交渉していける行動的な方、そして日・洋・彫・工・書・写全会員の理解の上に立った真の代表者でなければ意味がないだろう。

現在美協以外の他文化団体は役員選任をどのように行っているのだろうか。美協はこんどのことで役員選挙法も含めて規約改正をせまられているようだが、文化団体の望ましい役員選出方法はどうあるべきかをこの際考えなければならない時機にきているように思う。

芸術文化の問題は特に、たして2や3で割るといったような数字できれいに割り切れるものではない。したがってその創作にあたる会員がその会の代表者や、役員の選出を市長や、県議の選挙のように投票による多数決で簡単に選任することは、あとあとまで問題がたくさん残ると思う。

文化団体ならそれらしく、十分に話し合い、譲るべきは譲りあって円満に解決し、明るい文化団体をつくって県民文化に寄与しなければならないと思う。　（K）

民　踊

〝ふるさと大分〟民踊界の歩み

江　藤　豊　南
県芸振会議理事・県民踊保存会長

わが大分県には新旧数多くの優れた民踊がある。大分の「鶴崎おどり」、東国東の「姫島おどり」、豊後高田の「草地おどり」、玖珠の「山路おどり」、日田の「コツコツ節」、宇目町の「宇目の歌げんか」、佐賀関の「関の鯛つり唄」、津久見の「扇子おどり」、別府の「ヤッチキ」「別府ばやし」、「別府ながし」などは古くから伝わるもので、「別府音頭」、「瀬戸の島々」、「豊後追分」、「温泉おどり」などは新民踊である。

何れもレコードとなっており、ラジオやテレビで盛んに放送され宣伝されてもいる。〝民踊のある暮し〟の豊かさが見直され、日本芸能の進む道をひらく一つの大事業となりつつあるが、民踊は健全なレクリエーションであり、趣味生活の向上と健康法をあわせ、本県の観光の面にも大いに役立てたいと思っている。

昭和７年私は商用で上京の際、日比谷公園で「丸の内音頭」を踊って以来、民踊の楽しさと体育的なよさを感じてから80歳まで踊り続けている。会名のごとく百までも元気に踊りたいというのが願いである。昭和８年、別府に転住し民踊の普及発展に専念しようと決心したが、過去をふり返って見て決して良い事ばかりでなかった。しかし愉快に思った思い出の一端をのべる。

昭和８年東京音頭が大ヒットして、全国的に大流行したことがある。実はそのもとおこしは大分県の同業者であった。一丸となって「丸の内音頭」の販売成績を上げたこと自ら踊りお客様も踊らせ、踊り用のレコードとして販売したことにある。それは百発二百中の商略としてビクター誌にその詳細が掲さいされた。「別府音頭」も同年民踊ブームにのって三業組合が懸賞募集し、西条八十選補作、中山晋平作曲振付、唄勝太郎でＶ社から発売、未だに売れている。９年２月別検の富江さんの唄「瀬戸の島々」がＶ社から発売、作詞作曲の山下弁護士さんと富江さんと３人は県下の女学校を廻って唄と踊りを教えた。同年８月は、別府市制10周年の記念行事としてハマダ蓄音器とエトウ南海堂が委嘱され、30数日間も今の仲よし公園の広場で音頭大会を開いた。踊ったのは「別府音頭」や「瀬戸の島々」、「別府ながし」などであった。10年８月豊州新聞50周年記念で大分県行進曲を懸賞募集、庄武憲太郎氏が入選、江口夜詩作曲でＣ社より発売されたが、これまた大ヒットであった。

11年１月には大分県工業協会主催で体育学校の赤間雅彦先生の体育民踊の講習会があり、また、12年には別府博に大毎さんが温泉おどりを懸賞募集した。大村能章作曲、唄音丸でＣ社発売、これも会期中別検出演の大宣伝でしたが、南海堂も正門前に大宣伝塔を立てたり別府球場内のサーカスのドンチョーを寄贈したり温泉館に売店を出したりして「温泉おどり」の大宣伝に協力したものでした。16年には「別府ながし」、29年には「宇目の歌げんか」、30年には別検の富江さんの「豊後追分」と、梅園さんの「コツコツ節」、38年には「関の鯛つり唄」など県下民踊レコードの発売と同時にこれが普及につとめた事を思い出す。

県内の民踊について

河　野　豊　州
別府市民踊連理事長・別府市民踊研会長

民謡は民族の生活から自然に発生し、時代感覚を反映して流行するものであるが、近代は地域団体等記念行事に創作されることもある。

喜び、悲しみ、恋愛、望郷、祈り、労働等の感情を素朴に歌い上げる、この快適なリズムに誘われて民謡（うた）のあるところ必ず民踊（おどり）がある。

別府市の民踊を見ても、古くは「別府ばやし」の様に慶長年間から唄われたものが現存するもあり、「別府音頭」の如く大正年間からあったものを昭和９年西条八十作曲、中山晋平振付で面目を一新し、この機に別府音頭大会が発足したといわれるものもある。「別府ながし」や、「温泉おどり」は昭和12年別府国際観光温泉大博覧会記念事業に新民謡として発表され、「別府湯けむり」は昭和37年大分の方言を唄い込んで売り出され、「関の鯛つり唄」も昭和39年レコード化して全国版で出され、豊後追分の「九住高原」や無形文化財といわれる「鶴崎踊り」や「左衛門」、国東の「まてつき唄」「えび打ち唄」、日田の「コツコツ節」、玖珠の「山路踊り」、豊後高田市近郊の「草地踊り」、大分市の「チキリンばやし」等県下の民謡は７00余もあるといわれ大半は民踊が付随している。

民踊は昔から盆踊りとして仏の供養踊りであり、庶民老若男女の娯楽でもあったが、昭和33年東京アジア大会のエキジビションとして静岡の「茶切節」が婦人団体の手で公開され、テレビ放送されるや民踊熱は全国的に広がり、また大分国体に鶴崎踊りが公開演技としてテレビ放送され県下の民踊熱に一層の拍車をかけたのであった。さらに昭和36年法律第141号スポーツ振興法が公布され、民踊は社会体育として脚光を浴び昭和45年頃より小、中、高校の学習指導要領にも採り上げられて民謡も民踊と共にいよいよ発展し、民踊団体も続々と結成され、これを統合して大分県民踊連盟あり、大分市民踊連盟あり、別府市民踊連盟も結成された。その他の郡市にもそれぞれに民踊活動は盛んである。

かくして大分県の民踊のレベルは全国のトップクラスに在り、「別府ばやし」や「草地踊り」、津久見の「扇子踊り」はオーストリアのウイーンで開催される世界民俗舞踊大会にも地元民踊団体により出演するなど、大分県の民踊は前途洋々たるものがある。

内科・小児科
近藤内科
大分市金池南２丁目11―28上野丘中学前
TEL ㊸ 9553

庶民の喜びと悲しみの歴史

谷　本　一　夫
みす寿民俗舞踊研究会長

僕は民踊が大好きで、若いころ仕事かたがた民謡舞踊をたずねて東北一周したものである。しかし、九州にも東北に勝るよい唄や踊りがたくさんある。能から取ったといわれている二ツ拍子、三ツ拍子。杵築方面にある六調子、これは県下に散在して生活に密着し、20年から30年まで民踊と共に変化はなかった。ただし、謡の中には別府船唄などいつの間にか忘れ去らされたものや、曲や曲名も変えられた「由布は見えぬか」が豊後追分（久住高原）と変化したものもある。また、終戦ま近くなったころ出た鶴崎踊りの替え唄、タイヘイレコード8062英霊供養踊りがある。参考までに歌詩を１、２書くと、㈠晴れの御召に旗波分けて、征った笑顔が目に浮ぶ　㈡征ってあっぱれ護国の神と、咲いて九段の桜花（以下略）一肉親を失い、その上加えての食糧難で、ふんまんやるせない遺族の気持ちを安らかにするのにずい分役に立った。その一例に終戦直前別府市駅前通り北側全部、南側一部の強制疎開があった。

その後23年に駅前通り繁栄会を結成したが、初代会長に選任された僕は、肉親を失い、なにかにつけて反対する者が多く、役員一同も困りはてていた時、皆の気持ちの統一ができたらと、駅前通りおよび周辺の英霊供養踊りを思い立って呼びかけた。僕の信仰と民踊が効を奏し、住民の幸せと繁栄を願う気持ちが通じて、一日にして全員協力を得たことがある。また、26年には両側の歩道が完成、今日の繁栄の基礎作りに役立ったよろこびをお伝えするとともに民謡舞踊はそこに生きる庶民の喜びと悲しみの歴史がありその地方の土のにおいと生活のリズムがきざまれている。これからも、このよりよき暮しを築く伴奏である民踊を大切にしたいものである。

（[redacted]

ニュース

郷土の先覚者シリーズ第６集の予約

大分県先覚者シリーズ刊行会は第６集を近日刊行する。

第６集は、福田平八郎（執筆者・県芸振副会長宮崎豊氏）麻田　剛立（あさだごうりゅう）（執筆者・埼玉大学教授上原久氏）を編集している。

福田平八郎（明治25年～昭和49年）は、いうまでもなく郷土の誇る日本画の巨匠で、文化勲章受賞者である。

麻田剛立（享保19年２月～寛政11年５月・66歳）は、杵築の人、通称庄五郎、宝暦７年日蝕を実測、明和５年まで前後実測すること12回、宝暦13年９月１日の日蝕を予報し適中。測量器械を製造するなど、数学・理学の面で郷土の生んだ誇るべき学者である。

現在予約申込受付中なので希望者は次の要領で申し込むこと。

- 申込先　大分市府内町３丁目　県教育庁文化課内
  先覚者シリーズ刊行会事務局
- 申込様式

申込部数	申込責任者氏名	住　　所
部		

- 送　　料　受注者負担
- 頒布価格　300円程度

※予約受付後の増刷は困難なので、早目に申し込んで下さい。

名称の改正について

財団法人九州・沖縄文化協会は従来「第○回九州沖縄芸術祭」の名のもとに文化事業を推進してきたが、昭和51年４月１日から、「財団法人九州文化協会」と改称し、事業名も「第○回九州芸術祭」と称すことになった。

したがって、昭和51年度は「第８回九州芸術祭」と称すことになる。

なお、財団法人九州文化協会事務局は、これまでどおり福岡市中央区渡辺通２丁目１番82号　電気ビル別館５階である。事務局長木村茂氏。

第８回九州芸術祭における本県関係事業

昭和51年度、第８回をむかえる九州芸術祭は、新年度早々に公表されるが、現在内定した事業の本県関係事業としては次の案が計画されている。

- 九州芸術祭文学賞作品（小説）
  県内全域募集　５月～８月
- 吹奏楽九州キャラバン
  津久見市民会館　５月18日（火）18.00～
- 邦楽による九州ファンタジア
  日田市民会館　10月29日（金）
- 九州グラフィックデザイン展
  大分市内　11月中旬１週間

九州沖縄芸術祭文学賞贈呈式

本年度実施された九州沖縄芸術祭文学賞の贈呈式は、２月26日（木）11.00から福岡国際ホールで行われ、九州・沖縄文化協会会長瓦林潔氏から賞状・賞金が授与された。

最優秀作は「頭蓋に立つ旗」帯木蓬生（はばきぎほうせい）氏が入賞し、大分県の地区優秀作として「凍る日」竹折　勉氏（中津市大字[redacted]）が入賞した。

なお、本県関係としては17名が応募し、18編の作品が寄稿された。

首藤四郎・寺川泰郎両氏に対する感謝状贈呈式

首藤・寺川両氏の所蔵される書画・陶器等あわせて約70点を県立芸術会館等の収蔵展示資料として寄贈を受けたので、１月29日（木）午後１時から、知事室において感謝状の贈呈式が行われた。

なお、橋諸武彦氏からも古銭・藩札発貨幣経済史上、今日得難い貴重な資料約300点の寄贈を受けた。

また、知事・副知事への寄贈品のご紹介ということで、県立大分図書館文化ホールで、同日午後１時から上記受贈資料の展示を行った。

九州地区演劇講習会終了

文化庁・県教委・津久見市・同市教委主催、県芸振会議後援による本年度九州地区演劇講習会は、１月31日（土）～２月１日(日)の２日間、津久見市民会館で開催された。

本県をはじめ、九州各地区から青年団演劇・職場演劇・自立演劇・学校演劇等の関係者約70名が参加。

講師として桐朋学園短大助教授永曽信夫氏（演出家）、助演者として女優下村節子さんをむかえ、演劇の基本、実技指導、研究討議を行った。

なお、同会館の大ホールで、地元津久見市連合青年団演劇部により「手さぐりの青春」が約40分間モデル上演されこれを素材として講師による指導が行われるなど有意義な２日間であった。

1975大分県文化年鑑について

このほど1975年版県文化年鑑が出版された。関係者は一人一冊を必ず購入されるようおすすめします。

波紋

さらに十年後の大分県は？

藤永義高
県芸振会員・中津市三保公民館長

教育という輪の中で学校の二字を除いたすべてが社会教育。ところが社会教育の輪の中には幼児から老人まで、領域別には多種多様。行政面でも、村・町・市・県・ブロック（地域）。国と上層機関になると、細分化し、専門化している。

私自身四十五年三月学校教育から社会教育に移り中津管内を歩いてみて、社会教育を大事にしなければ、国家も、民族も、伸びないのではないかと思った。「自治」の能力を身につけるというが、「自分の事を自分でする」――ごく簡単な事すら隣人関係でできない。文化文明が進む程話し合いの場がなくなり、「連帯意識」が減少し、いわゆる悪い意味での「都市化」が開発という美名のもとに、僻地に滲透していく。

ここ十年間を静かにふりかえってみた。昭和六年三月大分県師範学校を卒業し、桜庭童話会からの縁で児童文化につっこみ、創作童話、口演童話、紙芝居から人形芝居、影絵。いろいろとやってきた。そのたび中津から大分まで何往復したか知れない。企部時間も、金も自分もちである。

県行政を考えても、そうした文化活動を助成するというので、「大分県教育委員会後援」として、何がしかの助成金を出したものである。それが社会教育課から文化室ができ、更に文化課になって、文化財と、芸術文化の担当ができた。ほんとうにありがたく、うれしく思っている。しかし大分県の僻地（下毛郡・中津市）を歩いて文化活動は大分市が一番恩恵を受けていると思った。

陽のあたる場所とあたらぬ場所をどうしてくれるという憤懣をかみしめている現在である。

さて、十年たってはじめて県立芸術会館もたつ。これからは生活にぜひうるおいをもたせる芸術文化の振興と、その必要性を理解させる強力な活動が必要だろうと思う。「芸振」二十年誌の時私は七十二歳。さて、どのくらい芸術文化の水が県民という大地にしみ込んでおるだろうか。

別府市美術館　紹介

1　沿革と施設

昭和25年10月1日所蔵品20点で開館（公民館3階）

昭和46年10月新館（展示壁面積180㎡）に移転開館

2　所蔵作品

日本画17点　洋画38点　彫刻1点　書跡1点

計57点所蔵

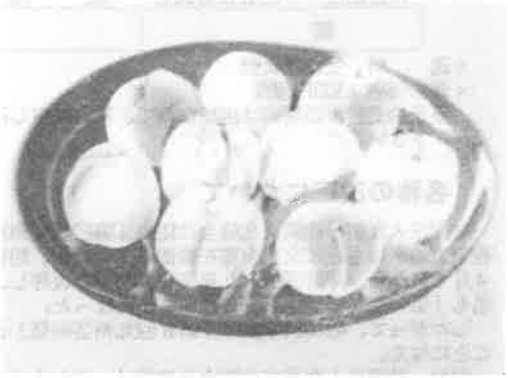
・主要作品

日本画・「流木」正井和行、「紫式部」菊池契月、「小狗」池田栄広、「鴨」山口華陽、「小禽」西山翠嶂、「柿」前田青邨、「ほととぎす」松本一洋、「西瓜」宇田荻邨、「柿」徳岡神泉、「桃」福田平八郎、「夏峰」村上華岳、「かぶ」金島桂華、「湖畔」堂本印象

洋　画・「静物」林武、「人物」小磯良平、「崖」猪熊弦一郎、「裸婦」安井曽太郎、「卓上草花」小出楢重、「琉球風景」満谷国四郎、「小姐（シャオチェイ）」梅原竜三郎、「籠のある静物」宮本三郎、「中禅寺湖畔」片多徳郎、「高崎山」中村研一、「パンを持つ子」佐藤敬、「金魚」佐藤敬、「緑の生物」宇治山哲平、「花」三岸節子、「西洋婦人」岡田謙三、「風景」田崎広助、「街頭風景」狄須高徳、「飯田高原」江藤純平、「塩魚」江藤哲、「聖日」森川豊三、「幽谷」矢岡勲、「走る」岩尾秀樹、「佐藤慶太郎肖像」岡田三郎助、「李花」権藤種男、「別府朝焼」伊谷賢蔵、「漁港の朝」吉岡憲、「魚の静物」中谷泰

彫　刻・「佐藤慶太郎像」朝倉文夫

その他・洋画、書道など



「桃」福田平八郎

所在地	別府市上田ノ湯町6―37
電話	0977(23)―2453
開館日	月曜～土曜　9時～4時
閉館日	日曜、祭日、年末年始
入場料	無料